

今福線シンポジウム

村上 英明

1、はじめに

今福線研究分科会が実際に始まったのは、2010年（平成22年）9月23日の打合せからで、これまで満5年半の間、活動が続けてきたわけである。

この活動の中でも2015年（平成27年）は、今福線シンポジウムが開催された特筆すべき年となったので、ここではこれについてまとめてみることにする。

2、シンポジウムの端緒

前回も報告したように我々の研究分科会は、島根県技術士会の中に今福線研究分科会として8名のメンバーで始めた会であり、毎年現地踏査を行って地元との交流などを続けて来た。

今福線の遺構を訪ねて鉄道マニアが、時々現地を訪ねて来るが、この路線の地図はないに等しい状況であったので、我々の研究分科会としてマップを作り、島根県技術士会のホームページ上で公開を始めていた。

ところが、2013年（平成25年）、久保田章市浜田市長が着任され、市内の「お宝さがし」が始まり、地元の方々の口から我々の活動が浜田市に伝わることになった。

そして2014年2月13日には、市長室において今福線についての説明会を行うこととなった。市側は久保田章市市長、観光振興課長、管財課長、建設部長ほかが出席され、我々研究分科会のメンバー5名（嘉藤研究分科会長、和田、盆子原、渡辺、村上）に加えて佐藤勝則島根県技術士会副会長も同席していただいた。

浜田市としては、「行ってみたい。見てみたい。食べてみたい。」という観光開発に取り組みたいと考えており、今福線を取り上げたいので協力してもら



写真—1、シンポジウムのチラシ

いたいとのことであった。

そこでまず、島根県技術士会の今福線マップに、浜田市のホームページからリンクできるようにしたいとの要望が出されたので、これを了承した。

次に、浜田市としては今福線シンポジウムを計画したい。場所は島根県立大学あたり、時期はこの年の10月か11月ごろ、全国から300人を集める規模で、同時に現地見学会も行いたいとのことであった。

我々の研究分科会としては、協力を惜しまないと約した。

3、シンポジウム開催へ向けての対応

その後は、浜田市・地元と我々研究分科会とで、打合せ会や合同の現地見学会を何度も行った。

現地は長年に渡って放置され続けてきており、雑木や雑草が生い茂り歩行が困難なところも多く、施工されていた手すりなどが腐食して危険な場所も少なくなかった。また、現地に入ろうとする場合に車を駐車できる場所は非常に少なく狭かった。もちろん、見学しようにも案内看板などはほとんどなかった。

これらを手当てしなければ、多人数の見学者を迎えることはできない。浜田市としては、これらの対処のために現地の安全対策や看板設置の計画を急ぎ、予算を手当てして、実施を急いだ。これらの作業だけで2014年度は過ぎてしまった。

その中で「おろち鳴き」周辺の木々の伐採要望の声が地元からあがり、河川管理者である島根県が、伐採を計画し発注した。ここは我々が発見し、観光名所とすべく命名して、その後、地元が標柱まで立ててくれた場所であった。

我々が発見した当時は、うっそうと竹木が茂っていて、「おろち鳴き」の地点からは音源になっている川も見えない状態であった。

しかし、2～3年前には、川への視界を遮っていた竹林が伐採され「おろち鳴き」の地点から川の流れが見えるようになって、観光拠点としての価値は半減したと我々はガッカリしていた。



写真一 2 設置された今福線マップの看板

この上、深山幽谷の雰囲気を演出しているかに見えた樹木まで伐採されては「おろち鳴き」の不思議さと面白さは失われ、観光拠点としての価値はなくなってしまうと考え、我々としては伐採してもらいたくはないものだと話していた。

島根県側のご配慮により樹木伐採の前の現地立会に我々も立ち合わせていただいたが、地元側で伐採の意向

はしっかりと固まっていたので、我々の意見など何の影響力も発揮することはできず、すべての竹木は伐採されてしまった。

現在は、地元の意向のとおり周辺のどこからでも「おろち鳴き橋」は、よく見えるようになっている。現在のように今福線が人々によく知られるようになってみると、「おろち鳴き」の小さな観光拠点よりも、路線が一望できることの方が優先されたのがよいのかもしれない。

このようにして現地は、多くの見学者を迎えるべく着々と準備が進められた。またそれらの中の一つには、我々の研究分科会が製作し公開している「今福線マップ」(前ページ写真一2)が大きな看板として現地に設置されたのは、嬉しいことであった。

そしてシンポジウムは、2015年8月8・9日に開催される運びとなった。

4、シンポジウム開催

いよいよその日は来た。8月8日には、「幻の鉄道遺産 今に復活」を標題に『広浜鉄道今福線を活かすシンポジウム』が島根県立大学の浜田キャンパスで開かれ、翌9日にはエキスカーションとして今福線の現地見学会が開催された。

4-1、縦断技術士会の開催

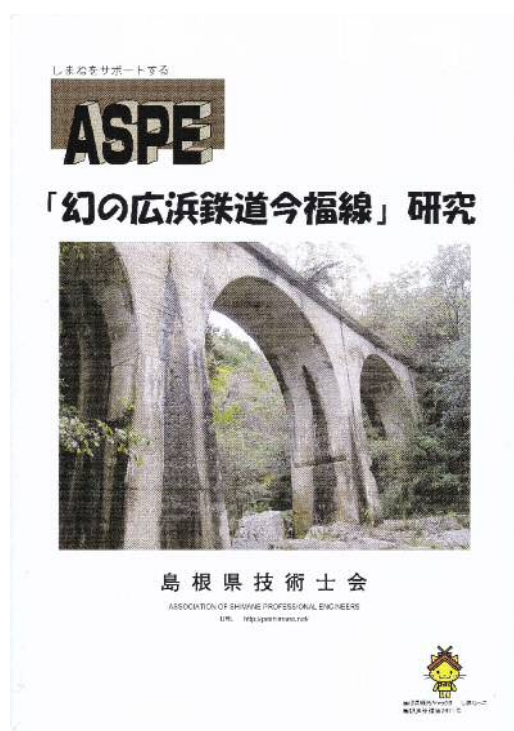
これに併せて、縦断技術士会が開催され、島根県、鳥取県、香川県、高知県から29名の技術士がこのシンポジウムに参加されたことも特筆すべきである。

4-2、シンポジウム

8日のシンポジウム会場となった県立大学のコンベンションホールは、満員の参加者であふれていた。

参加者全員にはあらかじめ、島根県技術士会で作成した論文集『「幻の広浜鉄道今福線」研究』が配布され好評で、その後、参加しなかった数箇所から貰えないかとの話が寄せられている。

司会進行役は、我々の研究分科会の盆小原照晶さんが勤め、久保田章市浜田市長の挨拶に続き、われらの林秀樹島根県技術士会長の挨拶で始まった。



写真一3、配布された論文集



写真一4、司会進行する盆子原さん

基調講演は、鉄道ライターの森口誠之氏の「未完に終わった鉄道計画 今福線・広浜鉄道の歩みとその意義」と産業観光コーディネーターの赤澤雅弘氏の「地域資源を活用した新しい産業観光スタイル」と題する興味深い内容であった。

次に休憩をはさんでパネルディスカッションが行われた。

コーディネーターは西藤真一島根県立大学准教授、パネラーは、今福線研究分科会から和田浩さん、地元代表の石本恒夫さん、現地に「ふるさと歴史紀行の会」を立ち上げた下村明雄氏、



写真—5、林会長の挨拶

基調講演をされた森口氏と赤澤氏の5名であった。

西藤准教授と石本さんは、すでに何度か一緒に現地に行っていたおり、我々とは顔なじみの方々である。

活発な討論が交わされ、会場の何人からも質問が出た。

会場にいた筆者としては、ディスカッションの



写真—6、パネラー紹介の和田さん

内容に残念なことがあり、発言を求めようと思ったが、活発な質問のため予定時間がかなり過ぎてしまったので、断念した。

それは、広浜鉄道完成後の広島駅までの所要時間に話題が及ばなかったことである。わずかにパネラーの一人が説明の中で「広島駅まで3時間半・・・」と発言されたが、それは戦前に計画していた下府駅から広島駅までの計画時間であり、旧線での所要時間だという説明もなされないままであった。

戦後に計画された浜田駅から広島を結ぶ新線での計画所要時間は、55分だったのである。筆者はこれを今福線研究の中でも大事なことだと思っている。今福線を含む広浜鉄道は幻に終わってしまったが、完成していれば浜田と広島は55分で結ばれていたはずなのであった。

つまり、広浜鉄道が出来ていれば浜田市は完全に広島の通勤圏になっていたはずなのである。しかも事業の中断がなければ30年も前に実現していたことである。

広浜鉄道の誘致を行い、熱意を傾けて建設に携わっていた人々の目前には、浜田市やその通過地点である金城、今福、佐野が広島への通勤圏内になる近未来が見えていたはずである。それが幻と消えた無念さは計り知れない。

4-3、懇親会

シンポジウムで話題がそこに及ばなかったことが、筆者としてはあまりに残念であったので、その晩の懇親会の席で久保田浜田市長に申し上げたが、すでにアルコールが入っていた時であったので、どこまで印象に残ったかは疑問である。



写真一七、懇親会での記念写真

5、エクスカージョン

翌9日には、エクスカージョンとして今福線の現地見学会が催された。現地は細い道や駐車場所の狭さなどの事情から、当初はマイクロバス3台で75名までとして募集されたが、希望者はそれを越えて多かったので急遽増やされたようであった。

同時に開催された縦断技術士会でも、別にマイクロバスを仕立てて現地見学を行った。

現地の狭さを考慮してそのコースや時刻がシンポジウム側の車と重ならないように計画していたが、それでも現地で車同士が鉢合わせ、片方がバックしなければならないこともあった。

参加者からは「このあたりは何度も通ったことがあり、構造物も見ていたのに、これが今福線の遺構とは知らなかった。よくわかってよかった。」との声が出ていた。



写真一八、縦断技術士会の見学会参加者

6、シンポジウム後

こうしてシンポジウムは終り、今福線が世間に広く知られる切っ掛けになっ

て現地を訪れる人々が増えてきたと聞く。

地元や浜田市からは、「これからは今福線の見学会やハイキングなどのイベントを今まで以上に計画することになるが、遺構について技術的な説明のできる案内者はいなかった。これからは、ぜひとも技術士会の方々に同行をお願いしたい。」という要請も出ており、我々としても期待に応えて行きたいと考えている。

今年も今福線研究分科会は、定例の現地踏査を行った。2010年には8名でスタートした会であるが、今では会員は14名が増えて陣容も整ってきた。また活動の幅も広がり、今年からは大仏鉄道など遠隔地の未成線を訪れた。

これからも地元や浜田市にの要請に応えたり、かつて今福線を推進したり建設に携わった方々に話を聞きに行ったりすることも控えている。

嘉藤太史会長以下、会員の意気も軒昂である。会の将来には大いに期待できる。

なお、今までは我々の会を「島根県技術士会今福線研究分科会」と呼んできたが、昨今一般に「今福線研究会」と呼ばれ通じるようになったことも付け加えておかなければならない。

以上。